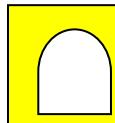


日吉台地下壕保存の会会報



第136号
日吉台地下壕保存の会

第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会

「戦争遺跡の保存と次世代への継承」参加報告 副会長 亀岡敦子

体験したことのない酷暑のさなか、8月18日～20日の3日間、第22回戦争遺跡保存全国シンポジウムが開かれました。今年の会場は愛知県豊川市で、テーマは「戦争遺跡の保存と次世代への継承」です。東洋一といわれた豊川海軍工廠跡地の一部に、73年を経て豊川市平和公園と平和交流館が誕生した、そのお披露目でもあります。参加者は延べ350人。一年に一度、全国から戦跡保存に関わる人たちが集い、交流する楽しい場でもあります。

(1) 8月18日 全体集会 豊川市勤労福祉会館大ホール

午後1時からの全体集会は、実行委員長・伊藤泰正氏の開会の言葉、豊川市長・山脇実氏の歓迎挨拶に続き、豊川市教育委員会・平松弘孝氏による、豊川海軍工廠平和公園誕生の経緯の説明で始まりました。

記念講演は、伊藤厚史氏による「愛知県の戦争記念碑からみた戦争と国民」です。名古屋市の文化財行政に携わってきた伊藤氏による、具体例をあげながらの講演は考えることが多いものでした。続いて、出原恵三共同代表による基調報告で、全国の戦跡保存の現状と、新しく史跡指定された数点が報告されました。2018年7月現在で、国指定文化財39件、県指定18件、市町村指定127件、国登録文化財86件、市区町村登録文化財12件、ほか3件が上がっているとのことで、大部分が1945年に造られたモノだそうです。

最後に「豊川海軍工廠平和公園開園と保存運動」伊藤泰正氏と、「豊川海軍工廠 天竜峡分工場 一戦争末期の工場疎開」(原 英章氏)の報告があり、20年以上の粘り強い活動が実を結び行政を動かした、嬉しい事例です。豊川海軍工廠は、1939年に開設した総面積330万m²の軍需工場で、機銃や弾薬などを製造し、日中戦争、アジア・太平洋戦争の戦争遂行に大きな役割を果たしただけではなく、労働力不足を補うために「学徒勤労動員」という大義名分をつけ、全国から学生・生徒だけではなく、女学生まで集めて、兵器生産に従事させました。そして、8月7日大空襲があり、若者たちも含む2,600名以上が命を失い、さらに多くが負傷したのです。その地の一部(3ヘクタール)を市が購入し、公園に整備し交流館を建て、ガイドを養成し、活動を続けています。

十菱駿武共同代表の閉会挨拶に続いて、戦跡保存全国ネットワークの総会がありました。

【目次】

| | | |
|----------------------------|----------------------------------|-----------|
| <u>報告【1-2p】</u> | 第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム 愛知豊川大会参加報告 | 副会長 亀岡敦子 |
| <u>豊川大会・フィールドワーク【2-5p】</u> | | |
| ☆Aコース：豊川海軍工廠平和公園等 | 運営委員 佐藤宗達 | |
| ☆Bコース：渥美半島の戦跡巡り | 運営委員 福岡 誠 | |
| <u>拡大ガイド学習会報告再録【5-10p】</u> | | |
| ☆「日本特攻艇戦史」紹介 | 運営委員 岡本雅之 | |
| ☆「ガイド一ロメモ～震洋～」 | 第10期ガイド 佐藤由香 | |
| ☆「ミッションスクールの受難（戦時下の宗教弾圧）」 | 運営委員 佐藤宗達 | |
| ☆「近衛上奏文」の紹介 | 運営委員 小山信雄 | |
| <u>寄稿【11p】</u> | ガイドとして早1年 第12期ガイド 永倉 肇 | |
| <u>報告【11p】</u> | 港北図書館パネル展・講演会 | 運営委員 小山信雄 |
| <u>連載【12-14p】</u> | | |
| ☆地下壕設備アレコレ(23) | 地下壕内に除湿用空調設備があった？ | |
| 運営委員 山田 譲 | | |
| ☆海外の戦跡めぐり(9) | 台北に残る鳥居 | 運営委員 佐藤宗達 |
| 報告【14p】 | 慶應義塾大学文学部公開講座を聞いて | 佐藤宗達 |
| <u>ご案内【14-15p】</u> | ☆第13期ガイド養成講座 | |
| ☆横浜・川崎戦争展 | | |
| <u>活動の記録(7~9月)【16p】</u> | | |

そして、交流会は一年ぶりの再会を喜び合い、活動のさらなる進展を心に期す、そんなひとときです。20余年も経つと、鬼籍に入った方々も多く、互いの無事を確かめるときもあります。

(2) 8月19日 分科会 豊川市勤労福祉会館3会場

今年も興味深い報告が数多くなされました。崩壊の可能性のある戦争遺跡は、出来るだけ正確な調査が必要であると実感しました。第3分科会では、活発な討論がなされましたが、若い世代の「無関心より興味」という言葉が気にかかりました。「興味」は入り口としては大事でしょうが、それからどれくらい深めることができるのか、疑問が残ります。

(3) 8月20日 フィールドワーク

2コースのフィールドワークが行われました。毎回、現地の方の詳しい説明があり、有意義な時間を過ごすことができます。

(4) 戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員会について

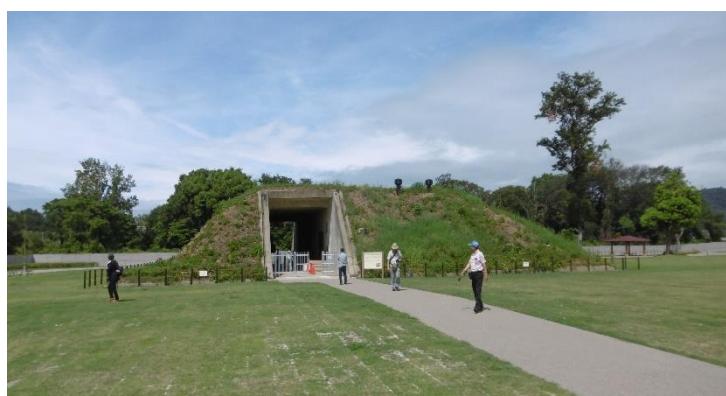
私も数年前からその一人で、全国ネットには運営委員会があります。全国に十数名の運営委員がいますが、年2回の運営委員会にも全員集まることはなく、なかなか話し合いが難しいのが現状です。メールだけでは思うに任せません。しかし、今年の大会前日の会では、いくつかの展示内容に問題がある「ミュージアム」の開設や、戦争賛美に繋がりかねない「軍事博物館的資料館」の開館などの、かなり本質的な問題についても話し合いがなされました。運営委員会の大切な役割のひとつで、これからも率直に話し合いを続けたいと思います。

豊川大会・フィールドワーク（2018.8.20）

☆Aコース（豊川海軍工廠平和公園とその関連施設）に参加しました

運営委員 佐藤宗達

8月20日午前8時半に豊川市勤労福祉会館前に集合、近くの市営諏訪墓地を見学しました。この墓地は元豊川海軍工廠跡地にあり、戦時中の元豊川海軍工廠被爆による戦没者、もしくはその遺族や関係団体のための専用墓地になっています、工廠従業員の慰靈碑に混じり勤労動員された戦没学生を弔う碑も数基あります。その後バスで豊川海軍工廠平和公園に移動しました。先ず公園内の豊川市平和交流館でビデオを見せてもらいました。敷地300ヘクタール、従業員は最大時で5万人の巨大な工廠でした。昭和20年8月7日、B29による250キロ爆弾の空襲で2,500人以上の死者と多数の負傷者がいました。その中には多くの動員学生や女子挺身隊員がふくまれておりました。なお交流館には当時の資料が展示されています。その後ガイドさんの案内で旧第一火薬庫を見学しました。建物はコンクリート造で土を被せています。内部は復元されており板張りです。また屋根は爆風で飛んでもいいような構造で、屋根も復元されております。次に旧第三信管置き場を見学しました。ここも火気厳禁で壁の電灯も取替えは外からするような構造です。また爆発事故があった際に回りに被害を出さないように土塁を設けてあります。そして防空壕跡を見ました。木の根元を掘り下げ板を渡して土を被せたものでとても身を守れるような施設ではありません。次にバスで工廠正門前に移動しました。正門は当時



旧第一火薬庫

のものを利用しているそうです。徒歩で平和の像を見ました。昭和40年に平和都市宣言と共に建立、3メートルの乙女の像は平和への祈りです。また近くには犠牲になった朝鮮人労働者の慰靈碑があり韓国国花のむくげが植えられております。

最後に豊川稻荷裏の境内地に建立された戦没者供養塔を見ました。8月7日の空襲で犠牲になった工廠関係者、動員された学徒、女学生の名前が2,548名刻まれております。8月7日の広島、9日の長崎の原爆投下の間のためでしょうか、豊川海軍工廠の空襲は広く伝わっておりません。我々もガイドの折に触れたいと思いました。



乙女の像

☆Bコース（渥美半島の戦跡めぐり） ～今も堂々と立つ6階建ての戦争遺跡～

運営委員 福岡 誠

●陸軍「伊良湖射場」

豊川駅前を朝8時半に出発。バスが向かった先は渥美半島の代表的な戦争遺跡「陸軍伊良湖（いらご）射場」。半島の末端部に1901年に設置された日本陸軍の大砲の実射試験場です。陸軍が使用する大砲や弾薬の多くがここで試験審査を受けたといいます。現地には今なお、様々な関連施設が残っていました。

まず目に留まったのは「警戒哨舎」と「境界石柱」（いずれも近くからの移設）。その隣には市の教育委員会により今年立てられたばかりの案内板も。続いて射場の門柱が残っていました。門の左側は今は道路ですが、当時軽便鉄道の線路で、港から陸揚げされた大砲や物資を射場に輸送していたといいます。



射場の門柱



警戒哨舎と境界石柱



無線電信室



気象塔兼展望塔



無線電信所と気象塔兼展望塔

門の先を進むと田畠が広がる中、突如物々しい高層の構造物が目に入り、見学者は釘付けに。通称『六階建て』と呼ばれているこの建物の正式名称は「気象塔兼展望塔」で大砲の弾道や風速・風向きなどの観測を行ったといいます。建物の裏側には機銃掃射の痕跡がはっきりと残っていました。またその向かいには、点在する観測所や監的所との連絡を行っていた「無線電信所」も残っています。

●伊良湖集落移転「願はしきものは平和なり」

伊良湖射場の用地拡大のため 1905 年 9 月、伊良湖村（114 戸・729 人）は移転（半年後までに全村移転完了）の命令が出され、現在の伊良湖町へ移転させられました。バスの車内から伊良湖集落移転記念碑を観察。移転前に伊良湖を訪れ（2ヶ月滞在）、後に日本民俗学の父となった柳田國男がこのことを知ったときに記した「願はしきものは平和なり」が刻まれていました。

●本土決戦のための陣地

バスで少し移動し、伊良湖・太平洋が一望できる断崖絶壁の場所へ。海軍の防備衛所「伊良湖水道機雷封鎖監視所」跡です。伊良湖岬と三重県伊勢との間の伊良湖水道を機雷封鎖するための施設が建てられていました。現場はコンクリートの基礎や、台座のようなものが残っていました。



伊良湖水道機雷封鎖監視所跡

今回は多くの「地上」戦争遺跡群と接することとなりました。特に、戦争のために建てられた『6階建ての建物』が今もなお、こんなに見通しの良いところにあまりにも堂々と残っているその姿は、地下に眠る「日吉台地下壕」とは対照的な意味で衝撃を覚えました。現地は半島の末端で公共交通機関での到達ハードルが高く、チャーターバスで巡る貴重な機会となりました。案内人の安間慎氏をはじめお世話をして頂いた皆様にこの場をお借りし御礼申し上げます。

拡大ガイド学習会報告再録（2018.7.7）

☆〈震洋〉「日本特攻艇戦史」紹介

『日本特攻艇戦史——震洋・四式肉薄攻撃艇の開発と戦歴』

木俣滋郎著（1998年8月刊）抜粋

運営委員 岡本雅之

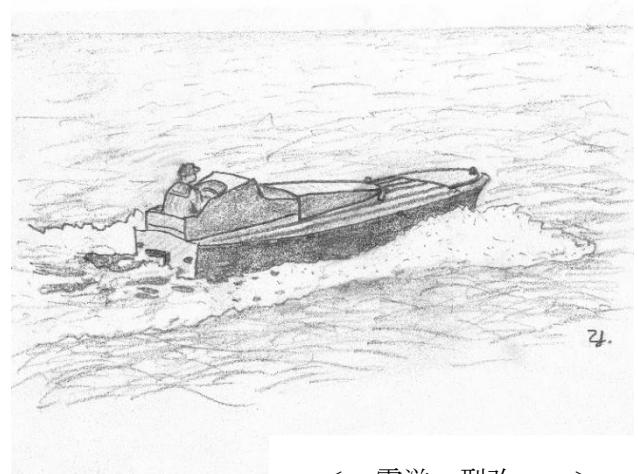
地下壕見学会に於いては作戦室の説明の中で、本土決戦の特攻兵器として「回天・震洋・桜花・伏龍」の説明をしている。この中の「震洋」について、たまたま1年前に古本屋で上記の本を見つけ購入した。中学時代、雑誌「丸」の愛読者であった私はその存在は知っていたが、詳しくは知らなかった。「震洋」、誰が、いつ考え、どれだけの数が造られ、どこに配置され、どんな戦果を挙げたのか、などについてこの本は詳しく説明している。また陸軍の同じ目的の特攻艇「四式肉薄攻撃艇(マルレ)」についてもふれている。7月7日の拡大ガイド学習会で私は4ページの資料にまとめて説明した。ここではそれをもとに「震洋」の概要について説明する。

「震洋」昭和19年8月に採用、体当たり攻撃艇でマルヨンの秘匿名で呼ばれていた。排水量1.35トン、全長5.1メートル、250キロ炸薬を搭載。一型、一型改一、二人乗りの五型が実用化。合わせて約6,200隻が建造された。一個戦隊50隻。指揮官は大尉または中尉（参考・第28震洋隊191名、内訳士官7名・搭乗員50名・本部付21名・基地隊78名・整備隊35名・震洋55隻。昭和19年11月編成）。震洋五型による隊（百番台の震洋隊）は24隻で1個震洋隊、総人員170から200名はどちらも同じ。昭和19年8月29日の第一震洋隊より昭和20年3月末までに58隊、5月以降8月5日までにさらに46隊が編成、合計104隊。

1. 「震洋」開発の経緯

元連合艦隊首席参謀、黒島亀人大佐（海軍兵学校44期）が昭和18年7月、軍令部第二部長へ。各方面から提案された新兵器について、昭和19年4月、九つの兵器にまとめ、緊急実験を要請。その中の四番目に「船外機エンジンの体当たりモーター艇」があった。他に、人間の乗る魚雷、対潜水艦用のミニ潜水艦などがあった。提出を受けた軍令部総長鳴田繁太郎大将（海軍兵学校32期・当時61歳）は昭和19年4月、艦政本部と航空本部の技術陣に対しこの九つの兵器を提案した。

試作艇は昭和19年5月27日に完成。エンジンはトヨタのKB型トラックのモノを流用、マスプロの波に乗っているトラックのエンジンを使ったことは特攻艇の生産が円滑にいったことの原因になった。マルヨンは試作完成より3ヶ月目の昭和19年8月28日に採用、「震洋」と命名された。9月13日、海軍省の中に「海軍特攻部」が設置される。初期のマルヨン隊員の中核は第二期予備学生、予科練の卒業者が多い。



< 震洋一型改 >

2. どこへ配置されたか

最初は小笠原へ。第一震洋隊、第二震洋隊、父島へ。第三、第四、第五震洋隊、12月4日に母島へ。小笠原諸島には第一から第五震洋隊が昭和19年9月～12月までに送られた。さらに硫黄島へも。栗林中将の第一〇九師団の守る同島の守備を固めるために第一六震洋隊を派遣、だが出港直前の昭和20年2月19日米海兵隊の上陸があり間に合わなかつた。この第一六震洋隊は八丈島に送られた。さらにフィリピンへ。9個震洋隊をフィリピン(コレヒドール島)へ。第七～十五震洋隊、昭和19年9月～11月にかけて送られ、第三十一特別根拠地隊(第三南遣艦隊)の指揮下に入る。二つの戦隊は海没。昭和19年12月、すでにレイテ島争奪戦は敗色が濃いものに。震洋480隻のレイテへの自航計画あり。マニラまで輸送船で運び、マニラからレイテまで自航してレイテ湾の輸送船団に突入する計画。昭和20年1月6日に佐世保を出港予定だったが、米上陸部隊がマニラ湾口に接近中との情報で中止。

3. どのような戦果を挙げたか

コレヒドール島の震洋隊、約千名(基地隊含む)、第七・第九・第十・第十一・第十二・第十三震洋隊計250隻。第三三一設営隊・第三二八設営隊計800名。艦砲射撃や空襲により震洋艇の損失が多く昭和20年1月30日現在、100隻が残るのみ。さらに激しく砲撃され震洋艇の損失が増える一方。そんな中、2月14日、真夜中に第十二震洋隊36隻が出陣、これが日本海軍史上初の特攻艇の出撃である。この日、米軍はバターン半島南端のマリベレス漁港に4,300名が上陸。2月25日、上陸支援艇5隻が停泊。このうち3隻を撃沈、1隻かく座。第十二震洋隊の戦死者は188名中131名。2週間にわたるコレヒドール島攻防戦は終わり、3月2日まで島は完全に米軍の手に渡る。かくて第七、九、十、十一、十二、十三震洋隊は最も早く玉碎した震洋隊となった。

4. 中国、台湾へ展開

ボルネオ島北部のサンダカンに第六震洋隊が昭和19年10月13日、ボルネオの守備に着く。第六震洋隊総員284名、大半は栄養失調とマラリアにやられ終戦時には100名しか生存しなかつた。同隊の震洋1隻はキャンベラ市の戦争博物館に展示されている。現存する本物の震洋はこれ1隻のみ。

台湾への派遣：震洋隊12個(海没2個を含む)を昭和19年11月以降台湾へ送った。三桁、100番台の震洋隊は二人乗りの艇25隻からなる新編成の震洋隊である。第一〇二震洋隊の編成。計191名(士官8、本部付き18、搭乗員50、基地隊75、整備兵40)。米軍は台湾に上陸することなく沖縄に上陸。この震洋隊は台湾であたら遊兵と化してしまう。

中国方面の震洋隊：中国へは昭和20年3月末までに震洋隊13隊が送られた。海南島、3個戦隊。香港、3個戦隊。アモイ、2個戦隊。舟山(チュウシャン)列島、5個戦隊。しかし、在中国の震洋隊は一度も実戦に参加することはなかつた。

5. 奄美大島・沖縄への配置

奄美大島・宮古島・石垣島・沖縄へ。奄美大島、5個戦隊。石垣島、5個戦隊。沖縄本島2個戦隊。宮古島、1個戦隊。計13隊。沖縄での震洋隊の戦果、米軍上陸前に2、3度出撃したが戦果は無かつた。爆撃で、上陸前の3月31日には両震洋隊の行動可能な艇はわずか20隻。4月3日夜、5隻が出撃、砲艦LCI82へ体当たり、この砲艦は乗組員65名中戦死8、負傷11名を出し沈没。(砲艦→歩兵上陸艇LCIの船体(257トン)を利用し歩兵を載せないで40mm機関砲と20mm機銃を装備した15ノットの小型艦。) 震洋が敵を沈めたのはコレヒドール島以来、2ヶ月ぶり。この砲艦撃沈が日本海軍特攻艇の挙げた最後の戦果となつた。

6. 本土決戦に備えて

昭和20年4月8日、陸海軍は本土決戦の計画大綱を策定。特攻戦隊の編成、沿岸防御のために、昭和20年3月～7月までに第一から第八までの特攻戦隊が設けられた。司令官は少将、一つの特攻戦隊は、1から6個の突撃隊からなる。突撃隊の主力は震洋50隻～25隻、これがいくつか集まつたものに回天や特殊潜航艇が加わって1個の突撃隊を編成する。

7. 終戦と特攻艇

特攻艇は多くの費用と手間をかけてマスプロされた。しかしその割には期待された戦果は挙がらなかった。終戦時、震洋は2,150隻、陸軍の四式連絡艇は700隻があった。

「震洋」は以上の様に兵器として大きな成果は挙げられなかった。しかし、多くの若者たちが無謀な作戦用兵によって死んでいった事実に想いをはせたい。

☆ガイド一口メモ ~震洋~

第10期ガイド 佐藤 由香

作戦室で特攻兵器のお話をする際、私が参考にした情報です。

1. 「震洋」について (東京湾観光情報局 H.P. より抜粋)

「震洋」は、ベニヤ板製モーターべトの船内艇首部に爆薬を搭載。搭乗員が乗り込んで操縦して目標とする敵艦に体当たり攻撃を仕掛ける水上特攻艇。木造艇5隻と極薄鋼板艇2隻の試作艇は、昭和19年の5月27日の海軍記念日に完成、8月28日に正式採用。構造が簡単であることから民間の軍需工場で生産され、終戦までに6,197隻が製造、当初はフィリピンなどの沿岸にも配備。エンジンにはトヨタの4トン積トラックの自動車エンジン（トヨタ特KC型ガソリンエンジン）を改良して搭載。

トヨタKC型・・・「KB型」の戦時型トラック。鋼材節約企画車。1943年から47年3月まで生産。エンジンは水冷直列6気筒（トヨタ自動車75年史より）

2. 館山市と「震洋」の関係

(東京湾観光情報局 H.P. 及び安房文化遺産フォーラム H.P. より抜粋)

1944年10月 レイテ沖海戦敗北、制海・制空権を失う。

1945年1月19日 「帝国陸海軍作戦計画大綱」が示され、「東京湾守備兵団方針大綱」で「敵の上陸が予想される館山湾、平砂浦、千倉湾に特に邀撃体制を強化する」ことが定められた。

1945年3月下旬 東京湾に突き出した洲崎近くの西岬村波左間（現：館山市波左間）に特攻基地の建設開始。2,300名の兵士が「震洋」の格納壕をはじめ居住・燃料・兵器・食料などの素掘りの地下壕を突貫工事。

1945年6月下旬 第一特攻戦隊第18突撃隊が、1人乗り「震洋」53隻と2人乗り「震洋」5隻を主力とする、第59震洋隊の配備命令。

1945年7月14日 第59震洋隊（部隊長：真鍋康夫中尉 総員176名）配属決定。

1945年8月 1号艇をすべて壕に収納し、爆装準備も完了するも実戦では使われず終戦。

3. 震洋の残骸発見ニュース

2017.8.24 朝日新聞デジタル「海底に特攻艇‘震洋’のエンジンか 千葉・館山沖に残骸」

太平洋戦争末期に日本海軍が造った特攻艇「震洋」のエンジンなどとみられる残骸が、千葉県館山市沖の海底で見つかった。館山には当時震洋の特攻隊基地があり、敗戦時に上官の命令で特攻艇を沖合に沈めたという元兵士の証言と合致する。残骸を見つけたのは、ダイビングサービス「波左間海中公園」を経営する荒川寛幸さん（79）約半年前、波左間漁港の北西沖約1キロの水深32メートルの海底で、長さ1メートル余りのエンジンと直径約30センチのスクリューとみられる金属塊のほか、爆薬とみられる塊を見つけた。



2017.8.24 朝日新聞デジタルより

☆ 「ミッショナリースクールの受難」（戦時下の宗教弾圧） 運営委員 佐藤宗達
『神奈川県の戦争遺跡』（大月書店 神奈川県歴史教育者協議会編）より抜粋

横浜市南区蒔田の小高い丘の上に、創立以来115年という長い伝統を誇るキリスト教主義学校横浜英和学院が建っています。この学校は戦時からずっと成美学園とよばれていました。学校に1枚の古い写真が残されています。1940（昭和15）年すでに日中戦争は泥沼化し、石油などの資源を求めて南方への進出が決定され、太平洋戦争は目前に迫っていました。

横浜には明治初年から来日したキリスト教各派の宣教師によって聖書にもとづく教育を行う私立学校、いわゆるミッショナリースクールが次々と創設されました。この学校のほかに女学校ではフェリス（※）、横浜共立（※※）、搜真、横浜雙葉、男子では関東学院と戦前までで計6校を数えます。これらの学校はいづれも充実した英語教育などにより地域の信頼を得ていましたが、創立以来ずっとアメリカやフランスの宣教母体からの経済的援助を受け、校長や理事長を外国人にしているところも多かったです。

しかし日中戦争が深刻化し排外主義が高まるとともに外国に依存した体質が批判を受け、経済的な自立を迫られるようになってきました。また天皇の神格化とともにキリスト教信仰自体も警察や憲兵からの警戒の対象とされるようになってきました。

そのためキリスト教主義学校では聖書だけでなく、「教育勅語」をも教育の基本に据えることを改めて明確にしなければならなくなりました。成美学園の校名も教育勅語の一節「…億兆心を一にして世々その美を済せるは此れ我が國体の清華にして…」の「美を済す」からとて、1939（昭和14）年、「成美」に変更したもので、それ以前は「横浜英和女学校」として親しまれてきたのです（96年4月に現校名※※※に変更）。校名変更に先立つ1938（昭和13）年9月にはアメリカ人のハジス校長は辞任し、同校初の日本人校長が就任、39年4月には財団法人を設立して、アメリカの教会から経済的にも独立しました。

その年の5月、文部省と県学務課から突然8人の督学官らが同校を視察に訪れました。キリスト教教育と英語教育の実態を視察するため、終日授業を参観した上に礼拝を担当した教師に「神と天皇と比べてどういう位置にあるのか」と嫌がらせともいえる質問を浴びせ、生徒にまで「天照大神と神様とどっちが偉いと思うか」と問い合わせたりしました。

その後、同校小学校における英語の授業は時間割から削除されました。1941（昭和16）年4月には初めて御真影が「下賜」され、報国団の結成、なぎなた訓練の実施、勤労動員とミッショナリースクールもいやおうなしに戦時体制に組み込まれていきました。

※1889年「フェリス和英女学校」⇒1941年「横浜山手女学院」⇒1950年「フェリス女学院」

※※ 1936年、第五代校長に日本人校長

※※※ 現在、青山学院横浜英和中学高等学校（共学）

☆「近衛上奏文」の紹介

運営委員 小山信雄

見学会資料冊子「戦争遺跡を歩く・日吉」の「戦時下日吉の略年表見直し作業」を行う中で、「昭和20年2月14日：近衛文麿の天皇への上奏」の内容について気になった為、いわゆる「近衛上奏文」のことを良く調べてみると必要があると感じ、7月7日の拡大ガイド学習会のテーマの一つとして取り上げて見た。

※上奏とは：天皇に意見・事情などを申し上げること。

東京大学出版会『木戸幸一関係文書』に記されている全文は、「御下問」「御答」の部分も含め、約3,800文字にも及ぶものであり、内容の「特殊性」に大変驚かされたが、先ずは上奏文の骨子について以下述べてみたい。

★戦局の見通しは好転困難（敗戦必須）だが、英米世論は「国体の変更」とまでは進んではおらず、むしろ、国体護持の立場から最も憂うべきは、共産革命である。

★「共産革命」に向かい世界は急速に進行中（二段革命戦術）。国内外問わず。

欧州：ユーゴ、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、フィンランド、ドイツ、イラン、イスス、フランス、ベルギー、オランダ

日本：共産革命達成のあらゆる条件が日々進行中で、受容し易い環境に。

（生活の窮乏、労働者発言権の増大、英米に対する敵愾心と親ソ気分、軍部内一味の革新運動、便乗する新官僚の運動、背後から操る左翼分子の暗躍、1億玉碎を叫ぶ声…）

★そもそも、満州事変・支那事変を起こし、これを拡大し、遂に「大東亜戦争」にまで導いたのは、これら「軍部内一味」の意識的計画であることは今や明瞭。

★かかる危険が迫っている為、勝利の見込みなき戦争（最悪の事態）をこれ以上継続することなく、一日も早く「戦争終結の方途」を講ずべきだが、その前に「この一味」の「肅軍」が肝要。⇒「非常の御勇断をこそ望ましく」と上奏。

<以下は全文掲載>

御下問：我国体については近衛の考えとは異なり、軍部は、米国は我国体の変革迄も考え居る様、観測し居るが、その点は如何？

御答：軍部は国民の戦意を昂揚せしむる為にも強く云えるならんと考えらる。グレーの本心は左にあらずと信ず。グレーダ大使離任の際、秩父宮の御使に対する大使夫妻の態度・言葉等より見ても、我皇室に対しては充分なる敬意と認識を有すと信ず。但し米国は輿論の国なれば、今後戦局の発展如何によりては、将来変化なしとは保証し得ず。之戦争終結の至急に講ずるの要ありと考ふる重要な点なり。

※ジョセフ・グレー：駐日大使（昭7年6月～17年6月）。日米開戦回避に努めた。

御下問：先程の話に肅軍を必要とするとのことであったが、何を目標として肅軍せよと云うのか？

御答：一つの思想あり。之を目標とす。

御下問：人事の問題に結局なるが、近衛はどう考えて居るか？

御答：それは陛下のお考え……。

御下問：近衛にも判らない様では中々難しいと思う。

御答：従来軍は永く一つの思想の下に推進し來ったのであります、之に対しては又常に之に反対し來たりし者もありますので、此の方を起用して肅軍せしむるも一方策なりと考えらる。之には宇垣、香月、真崎、小畑、石原の此の三つの流れ有。之等を起用すれば当然摩擦を増大す。考え方で何時かは摩擦を生ずるものとすれば、此際之を避けることなく断行することも一つなるが、若し之を敵前にて実行するの危険を考慮するとせば、阿南・山下両大将の中を起用するも一案ならん。先般、平沼・岡田等と会合せし際にも此の話出たり。

賀陽宮（かやのみや）殿下は軍の建直には、山下大将が適任とお考えの様なり。

御下問：もう一度戦果を挙げてからでないと中々話は難しいと思う。

御答：そういう戦果が挙がれば誠に結構と思われますが、そういう時期がございませうか。

之も近き将来ならざるべからず。半年、1年先では役に立つまいと思います。

上記の「上奏」が行われたのが、昭和20年2月14日。連合艦隊は既に壊滅状態にあり、制海権も制空権もほとんど無く、本土決戦・一億玉碎が叫ばれる中、米軍の硫黄島上陸(2.29)、東京大空襲(3.10)、米軍の沖縄本島上陸(4.1)、更には戦艦大和の特攻作戦(4.6)が目前に迫っている時期であった。結果として、近衛の上奏の内容については、具体化されることなく、8月15日の終戦を迎えることになります。

「あまりにも異様であり現実離れしている」「近衛の責任逃れの弁だ」等数多くの批判もあるが、2/7～2/26にかけて、総理大臣経験者等7名の重臣達によって個別に行われた「上奏」に於いて、「敗戦は必須」「早急な講和」を上奏したのは近衛一人であった。

昭和16年12月8日の米英との開戦に至るまでの4年半の間には、「盧溝橋事件(昭12.7)」、「日独伊三国防共協定の締結(昭12.11)」「南京占領(昭12.12)」、「国家総動員法の成立(昭13.4)」、「大東亜共栄圏の確立(昭15.7)」、「日独伊三国軍事同盟の締結(昭15.9)」、「大政翼賛会の成立(昭15.10)」、「日ソ中立条約の締結(昭16.4)」等の出来事が起きていますが、これらの間、日本の国策の最高責任者は、3年半、3度の内閣総理大臣を務めた近衛文麿でした。

何故、日本人だけをみても、民間人を含む310万もの死者を出した、あの戦争が起きてしまったのか。少し遡れば、「何故、日中戦争は、不拡大方針が閣議決定されながら拡大・泥沼化していったのか」「何故、資源・工業生産力の遙かに上回る米国と戦争を始めることになったのか」、「何故、『敗戦必至・即時和平交渉の上奏』が半年間も実現されなかつたのか」・・・

疑問は続々と湧き上がってきますが、「戦争の真実を探り伝えようとしているもの」の一員として、少しでも自分の頭で考えて行きながら、真実の探求に努めてゆきたい思います。



寄稿

日吉台地下壕保存の会に入会しガイドとして早1年

第12期ガイド 永倉 肇

私はこの地下壕保存の会に入会して、そろそろ1年を迎えるとしております。最初はパネル展示会がきっかけで参加を申し込み、副会長さんに快く迎えて頂きました。早々に見学会に参加して、兼ねてより見たかった現在の“壕”的状態を見ることが出来ました。思ったより大きくしかも長さも長く壕の中は堅牢に造られているのに驚きました。70年以上前の職人の技術に驚嘆、日本の技術は凄いと感じた瞬間でした。

続いて戦跡をめぐるバスツアーに参加させて頂きました。このツアー「三浦半島・観音崎砲台群および横須賀軍港見学」は、日吉台地下壕とは別の戦争遺跡をみる大変貴重な体験でした。

また見学会で感じたことが少々ありました。足元が悪い日は特に壕に入るまでは見学者には普段以上に気を付ける必要がある。壕に入ってからも年齢差や健常者と障害者の違いが当然ありますので、全て自己責任とも言い切れず、運営担当も苦労するところであるとは思いますが、今後もこれらは課題の一つであると思いました。

私は当初より会の目的である史跡の保存、調査保存の意義、戦争と平和の問題、そして会の悲願でもある平和ミュージアムの設立に共感し、何かお役に立てれば幸いと感じた一人です。しかし毎月の見学会、勉強会、講演会等なかなか参加出来ない日も多く心苦しいところですが、少しでもガイドの一員としてお役に立てるよう、今後とも諸先輩にはご指導ご鞭撻を頂きつづけて行ければと思っているところです。

報告

港北図書館パネル展示会&講演会

運営委員 小山信雄・佐藤宗達

今年で5回目となります。8月に港北図書館にてパネル展示会（7.29～8.26）及び講演会（8.5）を行いました。講演会では、初めて地下壕の存在を知った方や、夏休みの宿題のテーマの為など、様々な方々に御来場いただきました。今回は、10代から80代迄の幅広い年齢の方々、合計30名の参加となり、1時間の講演後も沢山の質問をいただきました。8/12, 8/26に行った展示会場でのミニレクチャーにも、両日で30名以上の方々が熱心に私達の説明に耳を傾けてくれました。少しずつではありますが、確実に関心は広まりつつあると感じており、「継続は力なり」の精神で来年も頑張りたいと思います。



連載

地下壕設備アレコレ【23】

地下壕内に除湿用空調設備があった?

運営委員 山田譲

前回に引き続き『基地設営戦の全貌』(佐用泰司、森茂共著)の紹介です。この本の中に「換気防湿機械装置」というものが書かれています。その説明として「工場隧道減湿設備要領例」と題された図が「例示」されています。その図によれば、地下壕の中央部に「調和機」「冷凍機」「ポンプ」が置かれています。この「調和機」の真上に外気を吸入するための「ダクト」(堅坑か斜坑)があります。(添付図参照)

この「換気防湿機械装置」とは一体、何なのでしょうか。これについて本書では「隧道式工場における防湿はきわめて重要」として、「内地(日本国内のこと)においては6月ないし10月においては、外気の温度は20ないし30度、湿度は80ないし90%内外で、隧道内温度は20度程度であるから、この期間は自然換気のみで隧道内湿度を80%以下に保つことは不

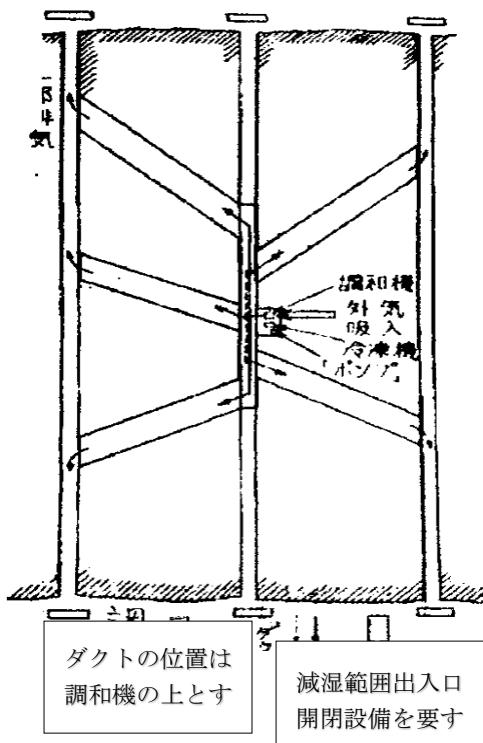
可能であって、機械設備の併用が必要であった。」と書かれています。これは「地下工場」の話なのですが、連合艦隊司令部の地下壕では通信兵が、聞き取った暗号文や解読した通信文を紙に鉛筆で書いています。しかし紙が湿気っていたら字が書けません。これが人事局や航空本部の地下壕だとインクとペンで書きますから、ますます筆記困難です。実際、地下壕勤務の理事生だった方が、そのように話されていました。この本では「地下工場」の「機械の腐鏽を防ぐため」と書かれていますが、日吉の海軍地下壕でも事情は同じだったようです。

また、この本には「防湿機械設備要領表」として、東洋調機工業株製の冷凍機、調和機を使った場合の、壕内床面積に応じた必要出力、機械サイズを8段階に分けて示しています。ですから、この防湿設備を実際に設備した地下施設があったのだとおもいます。

では、この「調和機」とは何でしょうか。本書にその説明はありませんが、東洋熱工業株のホームページには「空気調和設備」という言葉が出てきます。ですから「調和機」とは空気調和機です。私たちが普通、空調(エアコン)と言っているのは空気調和機の略称だったわけです。

では防湿(除湿)の仕組みはどうなっているのでしょうか。室内の湿度を下げるためには、まず外気をダクトで吸入します。他方で冷凍機を使って冷水をつくり、これを「調和機」内の熱交換器に送って吸入した外気を冷却します。すると外気は結露して水分が分離されます。水分の減った空気を、ボイラーなどで温めた温水で加温すると乾燥した空気になり、それを室内にポンプやファンで送るわけです。私たちが使っているエアコンの除湿機能も、これと同じ仕組みです。

この除湿設備が、日吉にもあったかどうかはわかりません。そういう記録も聞き取りもありません。ただ連合艦隊司令部壕の中には「機械室」(戦後、米軍が作らせた測量図に machine foundation と記されている部屋)があります。この部屋のすぐ左側には堅穴空気坑があり、機械室の側面から縦50cm、横80cm位の長方形の横穴があいていて、堅坑につながっています。本書の図に描かれている「ダクト」と一致する配置です。この機械室は、地上の寄宿舎から引き込んだ外部電源を変圧したり、交流を直流に変換したりする電気設備があった可能性の高い部屋です。しかし、この横穴は電線を引き込むには、ちょっと大きすぎるように思います。ここに外気吸入ダクトを通していった可能性があります。しかし、これはあくまで可



能性です。

これに限らず、日吉の地下壕はわからないことだらけです。そうなってしまったのは、敗戦と同時に海軍が（陸軍も）軍の公文書や図面をすべて燃やしてしまったからです。秘密主義、隠蔽体質は今の自衛隊にも引き継がれていて、南スーダンPKOやイラクでの戦闘状況日報の隠蔽、廃棄など今も続いている。権力者はつねに情報を隠して国民をだまし、ごまかして支配しようとします。日吉の地下壕の設備がどうなっていたのか調べようすると、まるで謎解きの世界に引き込まれてしまうというのも、考えてみればずいぶんおかしな話で、なんとも腹立たしいですね。

連載

海外の戦跡めぐり（9）台北に残る鳥居・台湾

運営委員 佐藤宗達

1895年下関条約により日本は清国より台湾を割譲された。日本は台湾を平定するため軍隊を派遣したが、指揮官・北白川宮能久は台南で戦病死した。皇族の戦病死ということから国費をもって台湾に神社を建てる事となり 1901年北白川宮を祭神とする台湾神社が建てられた。その後皇民化の流れで各地に神社が建てられ、寺廟整理・神社建設がすすめられた。アジア太平洋戦争の激化により台湾にも1942年に陸軍特別志願兵制度ができ、1944年には台湾にも徴兵制が施行され、武運長久の参拝が増えた。軍人・軍夫となった者は20万人強、そして戦没者は3万人を数える。

1945年8月の終戦に伴い日本の支配から解かれ、中国から国民党軍が渡来、日本時代のものは徹底的に破壊され、神社は破壊されたり忠烈祠に転用された。台湾神社の跡地は圓山大飯店になっています。意外と鳥居は破壊を免れて台湾各地に点在していたが今やほとんど姿を消してしまった。それでも基隆、花蓮などにヒッソリと残っております。

「台北に残る鳥居」台北の中心地：森林公園に鳥居が2基あります。これは第七代台湾総督・明石元二郎の墓所にあった鳥居です。明石総督は1918年に就任、わずか1年4か月で公務出張中に郷里・福岡で病死した。遺体は遺言により台湾に移され台北の三板橋墓地に埋葬された（ここには第三代台湾総督・乃木希典の母親も葬られておりました）。

終戦後、墓地は大陸から移動してきた国民党軍兵士の住居（バラック）が建てられ家と家の間に埋没していましたが、1997年ここが再開発されることになり、墓も整理され明石総督の墓も掘り起こされた。棺箱は楠製で廻りを炭で覆われていたようで78年ぶりに姿を現したが原型を留めていた。棺箱は

葬儀場に安置されたあと荼毘にふされ、1999年台北の郊外：新北市三芝区の墓地に埋葬された。墓所にあ

った鳥居は二二八和平公園に移されたが2010年再び元の地に戻されております。なお隣には秘書官を務めた鎌田正威の墓所にあった鳥居が並んで建つております。日本統治時代を偲ぶ縁として長く保存される事でしょう。



台北「林森公園」に残る鳥居



基隆の金山神社跡に残る鳥居

報告**慶應義塾大学文学部公開講座を聞いて**

運営委員 佐藤宗達

於：2018年6月30日 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール

講師：文学部民俗学考古学専攻 安藤広道先生、教育学専攻 山梨あや先生

慶應義塾大学文学部は2010~2013年度に公開講座「文学部は考える」シリーズを開講し、文学部創設125年を迎えた2015年度には「行動する文学部」シリーズ、2016年度には「文学部と体験する」シリーズを開講しました。今年度は「橋渡しする文学部」と題して、他者とのつながりや、歴史の伝え方、芸術の届け方について語り合う催しがありました。

安藤先生は先史考古学者であり博物館学芸員でしたが2004年に慶應義塾大学に戻られました。2008年に慶應義塾創立150年記念の一環として日吉キャンパスの蝮谷に体育館を造る過程で旧日本海軍・航空本部が使用していた地下壕の出入り口が発見されました。近現代の発掘をする方が居られず安藤先生が発掘調査をする事となりました。先史考古学では発掘調査の成果は個人で取り込み蓄積するそうですが、近現代の発掘調査は裾野が広く、市民の会が活躍しております。その例として日吉台地下壕保存の会をとりあげて、地下壕見学会のガイド、書籍・資料集の作成、会報の発行など30年にわたる活動を紹介されました。また全国でも郷土史家、市民の会が空襲の体験聞き取りをする、作家がルポタージュを書く、マスコミが取材・報道するなど歴史を伝えています。歴史は多様であり、文化財は専門家だけが扱うものではなく、誰もが遺跡や資料に触れながら歴史を語り合う場のセッティングをする事が研究者の役割だと締め括りました。

次に教育学専攻の山梨あや先生の教育史のお話がありました。なお7月14日には「他者とつながる」10月13日には「芸術を届ける」の公開講座が予定されています。



講師の方々：安藤広道先生（右）、山梨あや先生（中）、
司会者：上野大輔さん（左）

お知らせ 第13期（2019年度）日吉ガイド養成講座のご案内

講座回数：4回

日程：2019.1.12（土）、3.9（土）、4.6（土）、5.11（土）

時間：いずれも、13時～15時半

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎会議室

4.6（土）は16時半までフィールドワーク

参加費：2,000円（全4回分）

申込先：ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、
下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。〆切 1月10日（木）

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443（午前・夜間）

主催 日吉台地下壕保存の会

お知らせ

第26回川崎・横浜平和のための戦争展 2018 実施要項 テーマ「地域の戦争遺跡からアジア太平洋戦争を考える」

1. 趣旨および経緯

今年は戦後73年になり、アジア太平洋戦争の記憶風化がより一層進んでいます。直接体験の継承は70年が限界といわれるよう、戦争体験者から直接話を聞くチャンスは少なくなっています。私たちは長い間、地域に残る戦争遺跡を堀りおこし、保存し、伝えることをめざしてきました。年に一度川崎と横浜で交互に開催している、「川崎・横浜平和のための戦争展」も26回目となりました。

今から81年前の1937年は、日中戦争がはじまり、陸軍登戸研究所が川崎市多摩区に進出してきました。この秘密研究所は陸軍の生物化学兵器・偽札・風船爆弾などの謀略兵器の開発と製造をしており、その場所が現在の明治大学生田キャンパスです。現存する当時の建物は「登戸研究所保存の会」が長い間努力した結果、明治大学平和教育登戸研究所資料館として保存・公開されています。

「日吉台地下壕保存の会」は、連合艦隊日吉台地下壕を定期的に案内し、その価値を伝えています。川崎市中原区の「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」では地域の空襲体験や戦前・戦後の動きを町内会の協力を得て記録としてまとめあげ、様々な方法で、市民に伝える活動を行っています。また「みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会」も、川崎市宮前区にのこる「東部62部隊跡」を調査し、見学会や展示などを通して活動をしています。私たちは黙っていたら消えてしまったであろう「地域の戦争遺跡」を、未来に伝えることが出来る様に、市民としての努力を重ねてきました。

今年、川崎市は新たに教育文化遺産を遺す制度をつくりました。その制度に、「陸軍登戸研究所遺跡」と「東部62部隊遺物」を登録申請しています。

11月3、4日の2日間、川崎市中原区の川崎市平和館で以下の要領で開催します。写真や資料の展示は2日間を行い、若者の発表や講演は4日に屋内広場において行います。秋の一日、ご来場いただき、共に考え、語り合いたいと願っております。

2. テーマ 『地域の戦争遺跡からアジア太平洋戦争を考える』**3. 開催日程 2018年11月3日（土）～4日（日）9:00～16:30****4. 会 場 川崎市平和館（044-433-0171） 入場無料 事前予約不要****5. 内 容**

☆展示 平和館展示スペース 3、4日 9:00～16:30
実施団体の写真パネル・調査研究資料・地図など

☆若者の発表 平和館屋内広場 4日 10:00～12:00

1) 「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトの活動から

2) 戦争を「考える」ということ—明治大学平和教育登戸研究所資料館での業務を通して—

☆講演 平和館屋内広場 4日 13:00～15:00

吉田 裕氏（一橋大学特任教授）演題 アジア・太平洋戦争の現実 一兵士の視点から—

6. 運 営 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会**7. 主催・後援・実施団体**

主 催 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会

後 援 川崎市・川崎市教育委員会

実施団体 登戸研究所保存の会、日吉台地下壕保存の会、川崎中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

8. 代表・副代表・顧問

代 表 姫田 光義 登戸研究所保存の会

副代表 阿久沢 武史 日吉台地下壕保存の会

連絡先 森田 忠正 044-911-2726 亀岡 敏子 045-561-2758

活動の記録 2018年7月～9月

- 7／6(金) 平和のための戦争展示 in よこはま実行委員会 (かながわ県民センター)
 7／7(土) 拡大ガイド学習会 (来往舎 中会議室)
 7／11(水) 定例見学会 63名 慶應義塾高校地下壕見学会
 7／17(火) 会報135号発送 (来往舎 205号室)
 7／21(土) 夏休み見学会 33名 (92才の元通信兵の方も参加)
 7／28(土) 港北図書館パネル展示準備
 7／29(日)～8／26(日) 日吉台地下壕パネル展 (港北図書館)
 8／1(水) 夏休み見学会 47名
 8／4(土) 夏休み見学会 61名 (小中学生 24名)
 8／5(日) 日吉台地下壕講演会 (港北図書館会議室) 30名
 8／8(水) 定例見学会 51名 (中学生 3名)
 8／12(日) 港北図書館パネル展示 ミニレクチャー
 8／15(水) 夏休み見学会 25名 (小中学生 4名) ★7／28(土)の振替で実施

☆☆ 毎年「夏休み見学会」を数回行い、小中高生や親子の見学をお待ちしています。今年は大型台風接近のため、7月28日(土)の見学会を中止しました。8月8日も参加を見合せた学校がありました。長年にわたり見学会を行ってきて天候(予報)のために中止したのは2回ですが、荒天の予報で中止の判断をする事が増加すると思います。猛暑でもあり、壕内の温度、湿度も初めて経験する高さでした。☆☆

- 8／16(金) ★文化放送「大竹まことゴールデンアワー あの戦争を忘れない」で日吉の航空本部にお勤めだった中川雪子さんが紹介されました。
 8／18(土)～8／20(月) 第22回戦争遺跡保存全国ネットワーク愛知豊川大会 (豊川市勤労福祉会館)・オプショナルツアー 豊川海軍工廠、渥美半島の戦争遺跡
 8／26(日) 港北図書館パネル展示 ミニレクチャー 展示撤収作業
 9／2(日) ガイド学習会 (菊名フラット)
 9／11(火) 運営委員会 (来往舎 205号室)
 9／12(水) 定例見学会 57名
 9／19(水) 平和のための戦争展示川崎・横浜実行委員会 (法政第二高校教育研究所)
 9／22(土) 定例見学会 74名
 9／29(土) 保存の会暑気払い
 (日吉東急駅ビル)

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。

- ・原則として毎月2回実施
 (第2水曜日 10時～12時30分・第4土曜日
 13時～15時30分) 所要時間2時間半
- ・年内の見学会は定員に達している日もあります。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先 (会計) 亀岡敦子 : 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里 : 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス : <http://hiyoshidai-chikagou.net/>



第一校舎前の彼岸花 撮影:平成30年9月

日吉台地下壕保存の会会報

発行 日吉台地下壕保存の会

代表 阿久沢 武史

日吉台地下壕保存の会運営委員会

(年会費) 一口千円以上

郵便振込口座番号 00250-2-74921

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会